

他者に対する寛容さを規定する諸要因に関する一考察 — パーソナリティ、状況、社会的アイデンティティの観点から —

植 村 善太郎

【問題と目的】

真に多様化した社会を迎えるためには、異質性の受容が必要と思われる。しかし、その一方で、異質性を受容できない結果と考えられる事象は多く見受けられる（特定集団に対する差別・偏見、民族・宗教間の葛藤、仲間外れ、など）。そこで、異質なものを受け止め、多様さを認められることを寛容さと呼び、寛容であるための条件を検討することを、本研究の目的とする。

異質性が拒絶される一般的原因には大きく分けて2つのものが考えられる。1つ目は、異質な他者は類似性の高い他者に比べると、付き合うのにコストがより多く必要であるためといった、対人魅力研究からの説明である（長田，1984）。2つ目は、集団間関係の観点からの説明である。異質な他者は自己にとっては集団を同じくしない人間であり（Heider, 1958; Festinger, 1954）、社会的アイデンティティ理論（Tajfel et al., 1971; Hogg & Abrams, 1988; etc.）によれば、同じ集団に属する人間（内集団成員）に対しては、そうでない人間（外集団成員）に対するのと比べて、人は好意を持つ（内集団びいき）傾向があるというものである。

これらが示すことは、人は一般的傾向として異質な他者を好まないということである。しかし、その傾向に個人差が存在することは考えられるが、上記の観点でそれが論じられることは少ない。

異質性の受容に関連する個人差要因としては、権威主義的パーソナリティ（Adorno et al., 1950）、あいまいさへの耐性（Frenkel-Brunswik, 1954; Bundner, 1962）、認知的閉鎖欲求（Kruglanski & Webster, 1996）などが考えられる。例えば、権威主義的傾向の高い人は、既成の価値に盲従し、それを脅かすものを攻撃する傾向があると考えられる。また、あいまいさへの耐性が低いということは、あいまいな事態を、怖れの源泉とみる傾向とされている（Bunder, 1962）。これらの変数はいずれも、自己とは異質な人間に対する寛容さの個人差に影響を及ぼす変数と考えられる。

これまでの多くの研究においては、異質性の受容に関しては、一般的な傾向（すなわち状況論的アプローチ）と個体差的傾向（パーソナリティ論的アプローチ）が別々に考察されてきた。しかし、主体と状況が相互作用をして行動が決定されるという相互作用論的アプローチ

（Krahe, 1992）を考慮すると、両者を同時に検討することが必要だと思われる。

そこで本研究では、状況的要因（集団同一性など）と個人差的要因（あいまいさへの耐性など）の両者を視野に入れ、寛容さに対する相互作用的影響を検討することにする。

【研究1】 寛容さの尺度構成および寛容さに対するパーソナリティ要因、状況要因、そして状態的要因の影響の検討

目的 寛容さ尺度の構成と、寛容さに対するパーソナリティ要因、状況要因、そして状態的要因の影響の検討を目的とする。

＜調査1＞

方法 被験者 大学生147名（男性55名、女性89名、不明3名）。

測度 自由記述による予備調査（被験者：大学生29名）から、6つの状況（受容、参加、葛藤、葛藤後、交渉、ミス状況）における寛容さ尺度の項目が生成された。この6状況の寛容さ尺度と Davis（1983）のパースペクティブ・テーキング、情緒的共感性を使用した。

結果と考察 重回帰分析の結果、パースペクティブ・テーキングは設定された6状況すべての寛容さに有意に関連したが、情緒的共感性については状況に対する弁別性がみられた。葛藤後、葛藤、交渉状況では情緒的共感性は寛容さに有意な関連をもたなかった。これらの状況は強く感情的に喚起される状況と思われる。そのような状況では情緒的共感性は寛容さと関連しなくなるのだと考えられた。

相対的には認知的に相手の立場に立てる、パースペクティブ・テーキングの高い人がより寛容であるという結果であった。また6つの状況が自他の差異の明確性という軸で大きく二つにわけられることも示唆された。

＜調査2＞

目的 寛容さに対するあいまいさへの耐性、権威主義、集団同一性、そして価値観の影響の検討。

方法 被験者 大学生、専門学校生310名（男性142名、女性167名、不明1名）。

測度 寛容さ尺度は2状況（受容状況、葛藤後状況）のみを実施した。また、予備調査（被験者：大学生107名）

により、それぞれ10項目ずつに短縮したあいまいさへの耐性、権威主義尺度を使用した。また、調査の文脈に整合するように修正を加えた集団同一性尺度 (Karasawa, 1991) も実施した。さらに価値観尺度 (辻岡・村山, 1975) も使用した。

結果と考察 寛容さ尺度を主成分分析すると、大まかには受容傾向の高さを示す成分と、拒絶傾向の低さを示す成分とに分かれることが見いだされた。その二つの傾向はそれぞれ異なった変数と相関を示した。特徴的な結果としては、あいまいさへの耐性が高いと拒絶傾向が低い、受容傾向とは無相関であり、集団同一性が高いと積極的な受容を行なうが、拒絶傾向とは無相関という結果であった。

次に、あいまいさへの耐性と集団同一性とを独立変数とした、寛容さ尺度の分散分析を行った。受容的傾向、拒絶的傾向いずれにおいても受容状況で交互作用がみられた (それぞれ $F(1,302) = 5.81, p < .05$; $F(1,302) = 7.54, p < .01$)。

あいまいさへの耐性の高い群は集団同一性の高い状態で拒絶的な傾向が特に少なく、受容傾向については集団同一性に左右されずに一定に近い受容性を見せた。

あいまいさへの耐性の低い群は、集団同一性が高いときには受容的であると同時に拒絶的傾向も持ち合わせている。これは相手がどのような人かわからない段階では積極的に受容しようとするが、相手が異質な人間であると認知すると、拒絶を行う可能性があると考えられる。また、集団同一性が低い状態では大きく受容傾向が下がる傾向にあった。

これらから、あいまいさへの耐性は、寛容さに相対的には安定的に寄与する要因だと考えられた。なお、権威主義、価値観の結果については明瞭ではなかったので略す。

【研究2】 カテゴリー化のレベルとあいまいさへの耐性とが新規参入者に対する寛容さに及ぼす影響

目的 大集団 (本研究では所属大学) においては共通の成員であるが、小集団 (大集団の下位の組織で、ここではクラブ、サークルなど) では非共通の成員である他者を小集団に受け入れる際に、自他のカテゴリー化のレベルが大集団あるいは小集団であることの寛容さに対する影響を検討する。すなわち、対象者を同じ大集団の成員と見なしていれば、小集団への受け入れに際して寛容であり、小集団にとっての外集団成員と見なせば不寛容になると考えられる。

方法 被験者 大学生256名 (男性140名, 女性115名, 不明1名)。

調査方法 教示による場面想定法を用いた。被験者には所属集団を1つあげてもらい、その集団でアルバイトに行った場面を想定してもらった。そして、その集団に同じ大学の学生ではあるが、初対面の学生がアルバイトの作業グループに入ってくる際の、その新規参入者に対する寛容さを測定した。

被験者は教示により4群にわけられている。4群に対する教示は小集団活性化、小集団活性化のあと大集団活性化、大集団活性化、活性化なし条件である。それぞれのカテゴリー化のレベルでの寛容さが従属変数である。また、個人差変数として研究1で使用した、あいまいさへの耐性尺度が使用された。

結果と考察 教示によるカテゴリー化の操作が有効ではなく、条件ごとの分析を行っても意味のある結果は見られなかった。そこで、操作チェックに使用した、集団構成の知覚のレベル (大集団, 小集団, 個人) を独立変数とした分析を行った。

一元配置の分散分析によれば、受容的な傾向が個人レベルのカテゴリー化よりも大集団でのカテゴリー化で向上し、拒絶的な傾向が小集団レベルでのカテゴリー化よりも大集団レベルでのカテゴリー化で低下した。すなわち、より高次のレベルでのカテゴリー化が、寛容さに寄与する可能性が示唆された。

また、研究1の結果に比べると、あいまいさへの耐性の寛容さに対する影響力が小さくなっていった。カテゴリー化の影響力によって、個人差変数の影響力が弱められた結果とも考えられる。いずれにしるカテゴリー化のレベルの向上と不寛容さの低減とに関連があることが示唆された。

【むすび】

寛容さがパーソナリティと状況的要因との相互作用により構成されることが考察された。すなわち常に寛容な人が存在するとは考えにくいということである。

また、個人差変数が、集団成員としての自己カテゴリー化により寛容さに対する影響力を低下させることも考察された。すなわちカテゴリー化のレベルによって寛容さの高低は影響を受ける可能性がある。現実場面での問題解決を考えると、カテゴリー化の操作可能性の条件を検討することや、受容/排斥に至るまでの過程の解明が今後は必要とされてくると考えられる。